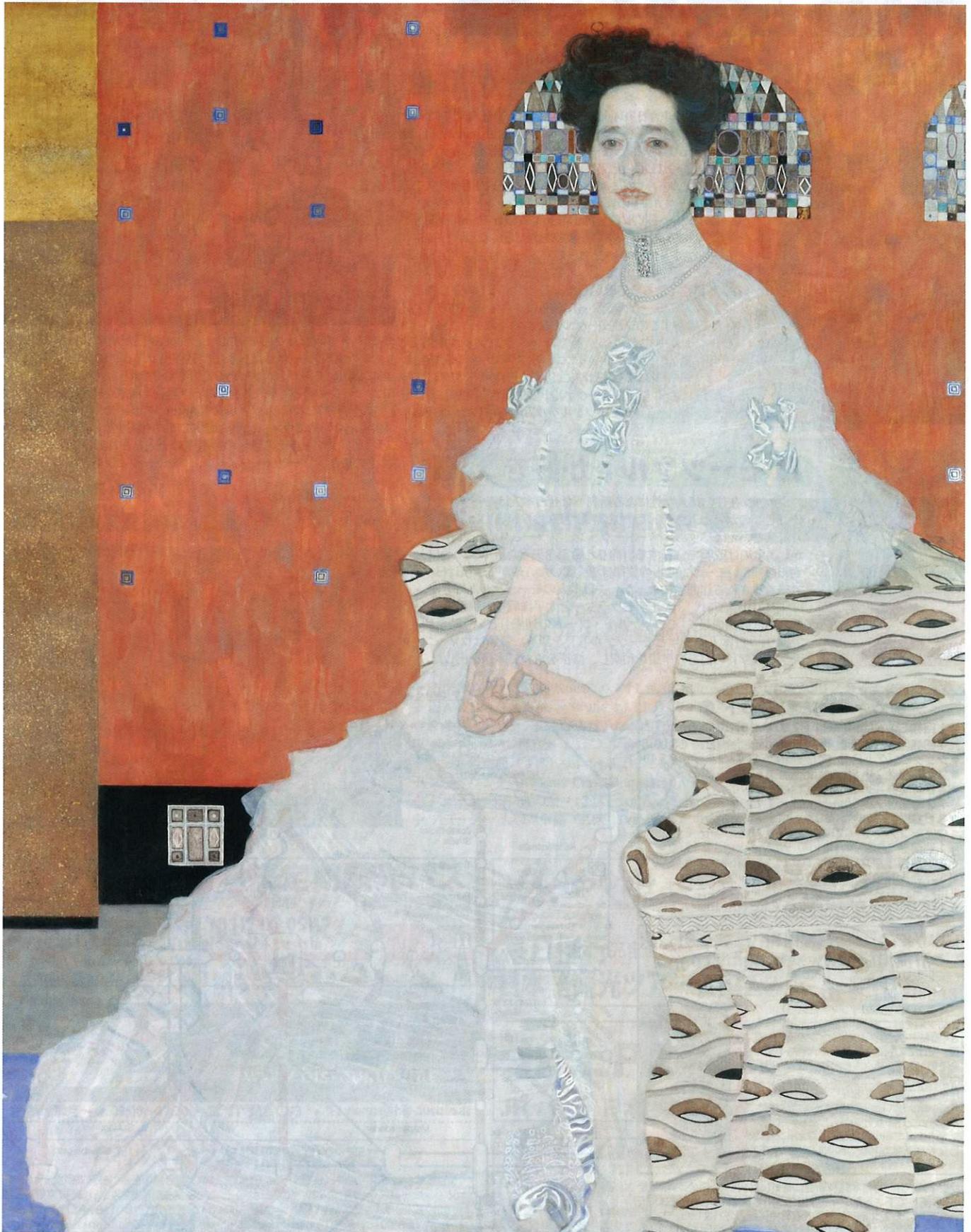


# 月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で  
ウィーンを伝える月刊情報紙  
おかげさまで今年は 創刊 24 年目  
創刊 1989 年 No. 281

## GEKKAN-WIEN 2012年11月号



# 杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 14



九月六〜八日に日本放射線影響学会第五回大会が東北大学川内北キャンパスにて開催された。放射線は医療ばかりでなく様々な産業分野で活用されており、人間生活に不可欠となっているが、福島原子力発電所事故は原子力エネルギー源に対する同学会の認識を一変させ、環境中に放出される放射線の安全管理が最重要な課題となった。「直ちに影響のない放射線被ばく」が将来も影響しないのかについて世界が回答を求めている状況となっている。同学会としては、福島原発を中心として放射線事故を掘り下げることに、今何を目指すべきかについて考える機会を提供するため、同学会では朝の教育講演と福島原発事故関連のシンポジウムを設定した。

筆者は、六日朝一番の「原子炉でなにが起こったか」と題する特別シンポジウムにおいて、「福島事故の経緯と教訓」のタイトルで招待講演を行った。これまでに出席した、東電、民間、国会、政府事故調査報告書の要点を紹介するとともに、調査で明らかとなった主な事項と不明な事項、事故の主な要因と教訓について私見を交えて説明した。引き続き、原子力機構の茅野基礎工学副部門長から環境に放出された放射性物質の 대기・海洋への拡散挙動について、放医研の酒井

放射線防護研究センター長から放出された放射性物質の健康への影響について報告があり、最後に三名に対して活発な質疑応答があった。それぞれの専門分野が連携したことにより、放射性物質の放出を軸とした福島事故の全体像が描けたのではないかと思っている。

さて、十月には八七年の利根川教授に続き、我が国 番目のノーベル生理学・医学賞を山中教授が受賞することが決まり、京都大学は久々の明るいニュースで盛り上がりつつある。そこで、今月のウィーンと京都の共通点として、理論物理学のメッカについて紹介したい。ウィーン大学は、エントロピーの式で有名なボルツマン、核分裂反応の発見者のマイトナー、ノーベル物理学賞のシュレーディンガーなどを輩出し、欧州でも有数の理論物理学のメッカである。ボルツマンを記念して、九区に理論物理学研究所が設立され、これに接する通りがボルツマン通りと名付けられた。国際原子力機関 (IAEA) がある二十二区にはマイトナー通りに並んでシュレーディンガー広場がある。一方、京都大学は、我が国初の湯川秀樹に始まり、朝永振一郎、江崎玲於奈、益川敏英、小林誠 (敬称略) とノーベル物理学賞受賞者を輩



特別シンポジウム (c) JRRS

出するなど、素粒子物理学を中心とする理論物理学のメッカである。湯川博士を記念して、京都大学に湯川記念館と基礎物理学研究所が設立されるとともに、益川記念館とその中に益川ホールや小林・益川記念室が設けられている。余談であるが、昭和四十四年、筆者が京都大学理学部に入学した時、我が国のノーベル賞受賞者は湯川博士だけであった。翌年三月に博士の退官記念講義が湯川記念館であり友人と覗きに行った。超満員の聴衆であった。「英国のディラック (ノーベル物理学賞) が、"Proton" を「エイプライオーライ」と発音するので、何がオーライなのかさっぱり分からなかった」との話覚えていて、三回生時は益川助手 (当時) から物理学演習を習った。複雑な物理定数群のオーダーを瞬で暗算するには驚嘆した。学生が変な答を出すと「とんでもない、かん歩けば十分などのジョークを連発した。これ位しか覚えていない出来の悪い学生であったが、今後も我が国からのノーベル賞がさらに続くことを祈念して、京都大学のスケッチを掲載させて頂く。

■杉本純 京都大学教授 / 元原子力機構ウィーン事務所長 ■

